【歴代会長祝辞】

全国歯放技連絡協議会と伴に

第 5 代会長
丸橋 一夫

会発足以前のことになりますが、関東地区にある歯科系大学の附属病院に勤務する技師達のための勉強会が発足され、その後、この協議会へと発展していきました。その時、参加した他校の技師の方々と色々な話をしましたが、口内法撮影だけに限っても技術的な違いに驚き、全国の大学ではどのようにして撮影を行っているのだろうかと考えたことを覚えています。

その後、この協議会の設立準備の段階から、一番の若手であった私は雑用係として会の設立に携わって参りましたが、それは、当時の私の上司であった西岡（初代会長：日本大学）らがこの協議会設立に向け、仕事の合間に活動していましたので、何かお手伝いをしたいという気持ちがあったためです。当時は、今のようにネット環境が整備されておらず、通信手段としては電話や手紙でしたので、各大学の技師長に連絡し、意思統一するのも大変な作業でした。

また、会設立後に会誌を発行することになり、その編集を私が担当することになりましたが、送られてくる原稿は全て手書きであったため、文章をコンピュータへ入力し、添付写真などを配置して編集しなくてはなりません。その頃のコンピュータは NEC の 88 や 98 と呼ばれる機種が全盛で、ソフトや日本語の辞書は 5 インチのフロッピーディスクに納められていましたので、文字を入力する度にドライブがガチャガチャと音を立て、フロッピーからデータを読み込んでいましたので、なかなか捗りませんでした。

使用していた一太郎というワープロソフトは、今のソフトと比べると機能がかなり限られていましたので、ソフトの機能を十二分に駆使して編集を行うため取扱説明書を何度も読み返しましたので、一太郎というソフトに関して当時はかなり精通していたと思います。

しかし、それでも、編集には大変時間が掛かりました。

原稿が一度に送られてくるわけではないので、送られてくる度に入力と編集を行い、その都度、会誌全体の構成を変更しなければならず、印刷所に出すまでに 3 ヶ月近く掛かりました。始めの頃は、印刷代をできるだけ安くするために、デジタルデータを印刷所に渡すのではなく、私が印刷した原稿を渡し、それを基に印刷していましたので、渡す原稿の印刷濃度が薄いと会誌の濃度も薄くなってしまうため、印刷には非常に気を遣いました。

当初から会誌は年 2 回発行と決めていましたので、1 年の半分は編集作業で潰れてしまいましたが、充実した時間を過ごしていました。そして、会長が田中氏（鶴見大学）に代わった時には、総務という大役を仰せつかりましたので、編集以外にも総務の仕事が舞い込み、仕事以外のほとんどの時間を連絡協議会の仕事に費やしていました。今考えると、この頃から本格的に連絡協議会にのめり込んだような気がします。

就職してから 10 数年経ち、仕事にも研究にも意欲満々だった頃にこの会が発足したのですが、相前後して日本放射線技術学会からも色々な仕事の依頼を受けるようになりました。撮影の標準化を目指した研究班の班員や初めてみなとみらいで行われることになった総会の実行委員、そして、定年までの 20 数年間勤めた JIS 委員などなど、日本放射線技術学会からの歯科関連の仕事に関して、東京では私が窓口のようになってしまったので、当時は、本来の業務以外の仕事も手一杯の状態でした。

私が連絡協議会に奉仕した30年という時間は、診療放射線技師として勤務した43年間の約7割に当たり、私にとって今では連絡協議会はまるで空気の如く必要不可欠なものとなりましたが、勤め始めた頃は、上司の西岡や医局の歯科医師である飯久保らに引っ張られながら、就業時間外に実験を行い、論文や学会などに発表していました。しかし、日本大学歯学部という範囲しか知らず、他校の技師がどのような業務や研究をしているかなど全く知りませんでしたので、日本歯科放射線学会に参加しても、他校の技師の方に声を掛けることもできず、技術的な議論もできず終いでした。

しかしその後、この協議会ができたお陰で多くの方達と知り合うことにより色々な知識を吸収し、時には激論も交わしました。また、共同研究した結果を論文としてまとめましたし、歯顎顔面領域の技術関連本を出版したおりには、多くの会員に執筆をお願いして、やっと出版まで漕ぎ着けた時の達成感を今でもはっきり覚えています。

また、30年の間に行われた総会・研修会では色々なことがありました。

1～6 回までの総会・研修会は各大学の施設や企業の会議室をお借りして行っていましたが、7回目（1996年）を担当した北海道医療大学の輪島技師長は、参加者全員を支笏湖の温泉ホテルに宿泊させ、全てをそのホテル内で行うという、当時としては思い切った総会・研修会を開催されました。その時、支笏湖畔の露天風呂から見た夕日を忘れることはできません。

2003年に福岡歯科大学主催で開催された時には、宿泊をかねて懇親会を“涼山泊”という旅館で行いました。川沿いにある情緒ある旅館でしたが、なんと一週間後のニュースで「大雨による川の増水で流された！」と知り愕然としました。大雨が一週間早かったらと思うと...。

またこの時、開催責任者であった太田隆介氏が、半年後の正月に急性クモ膜下出血で急逝されました。総会後に行われた役員会（10月頃）でご一緒した時にはお元気で、宴会後に駅まで送って戴いたのですが、その時には大変お元気で3ヶ月しないうちに他界されるとは思ってもいませんでした。（合掌）

また、最近のことなのでご記憶の方もいらっしゃると思いますが、2013年に日本大学主催で開催した研修会で特別講演をして戴いた厚生労働省の方が、その数年後、収賄で逮捕されるという前代未聞のことがありました。その方の名誉のために云っておきますが、当時、歯科のDICOM 規格に関しては第一人者であり、講演自体は素晴らしく、その後の質疑応答でも難しい話しを分かり易く教えて戴きました。

このように30年の間には色々なことがありましたが、会の存続に関して危機を感じたこともありました。

それは、2003年10月に歯学部のある国立大学（11大学のうち9大学）の附属病院で医・歯学部附属病院が統合された時です。国立大学がこの会から抜けてしまったら、片肺飛行を続ける飛行機と同じで、何時墜落（会を解散）してもおかしくない状況になってしまった時でした。しかしその時、本当に多くの方々から会の存続を望む声を戴いたことで力づけられました。

幸いにして、国立大学医学部技師長らのご理解も得られたため、片肺飛行を避けることができました。

私事になってしまいますが、今までの総会・研修会には、義母の葬儀と重なった年を除き、第1回目の東京医科歯科大学開催時から全ての会に出席してきました。

会が始まるまではとても待ち遠しく、いざ始まると“あっ”という間に終わってしまい、終わった時には毎回一次的な空虚感を感じていましたが、少し経つと、来年の研修会まで頑張ろ

うという前向きな気持ちが湧き上がってきて、日々の仕事も頑張れた気がします。

創設当時は幹事として、その後、総務・副会長を経て会長となり会長退任後は、新設された顧問という立場で常に会の運営にタッチしてきましたが、今回の総会で顧問を北森前会長に引き継ぎ、会の運営から解放され、安堵感と伴に少々の寂寥感を伴った複雑な思いに囚われました。

最近の研修会は、会員や企業からのリピーターも多く、盛会で、会自体も日本歯科放射線学会・日本診療放射線技師会そして日本放射線技術学会からも認知され、多くの有望な若手もそれぞれの分野で羽ばたいておりますので、老兵は安心して去ることができます。

これからも益々充実した会になることを祈念して筆を置きたいと思います。

永い間ありがとうございました。